

～カムパネルラとは～  
宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を込めたものです。

Vol. 7 2008年11月号

- 自分自身への旅・・・・・・・・・・・・・・・・・・菅井 裕行
- 一個のりんごから・・・・・・・・・・・・・・・・・・藤田 博
- 附属幼稚園の3歳児に人気のある絵本を紹介します・・・・・・・・田淵 昇三
- 子どもたちに大人気、目でも耳でも楽しめる絵本です・・・・・・・・佐藤 実千代
- 与えることの意味を考えさせてくれるこの一冊・・・・・・・・田島 由佳
- 新刊紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・藤田 博

## ■ 自分自身への旅

菅井 裕行

読後の余韻にひとりながら、はたしてこの絵本は本当に子ども向けの作品なの？といぶかしく思う自分に気が付く、そのような経験をした人は少なくないのではないのでしょうか？私にとって『ミシュカ』はそういう本の一冊です。



お話はシンプルで、かつ明快です。熊のぬいぐるみミシュカは、あきつぽく後かたづけのできない女の子のおもちゃとして登場します。そして、もうこれ以上いじわるな女の子のいいなりになるのは「嫌だ！」と思って、暖かな部屋から寒い雪の中へ飛び出します。「もうぜったいおもちゃのくまなんかにならないぞ」と一人つぶやきながら。道すがら、ミソサザイや蜂蜜の瓶そして2羽のガンに会い、ミシュカの心は躍ります。ミシュカはクリスマスが近いこと、そしてクリスマスには何かひとついいことをしなければならぬことを知り、自分も何かしようと思いつつ雪深い森を旅するうちに子ども達にプレゼントを配るトナカイに出会います。そしてトナカイのお手伝いをする事になるのです。楽しくて仕方がないオモチャ配りですが、でもこれでいいことをしていることになるのか？自問しつつ、とうとう一番最後に病気の男の子が一人寝ている家にとどりつきます。そこで、大きな袋の中にあつたオモチャをすべて配りつくしてしまったことに気が付くミシュカ。そのミシュカをトナカイは澄んだ目でじっと見つめます。ここから続く9行の文章で、緊張を孕んだ、しかし静かで透明な時間が描かれるのです。頁をめくると、ミシュカが自らオモチャとして男の子の足下に座り朝を待つシーンが描かれています。セリフはありません。さらに1頁めくるとそこにはミシュカのアップが描かれ、物語は閉じられるのです。その印象的なミシュカの顔。

今年の新入生合宿において、グループごとに自由討論の時間があり、そこではひとつの「テーマ」として「愛」という言葉が与えられました。私はその場でこのミシュカの読み聞かせを行い、学生諸君に自由に話し合ってもらいました。活発な議論になったと思います。学生の共通した見解は、ミシュカの自己犠牲が愛ではないか、というものでした。うむ。誰からも否定意見は出ません。けれどそれだけではなにか物足りない、全員がそういう顔をしています。なにか。それこそが、この作品のテーマであろうかと思えます。最後の頁のミシュカの顔に私はそれを読みます。原本を描いたロジャンは、大戦時ドイツに占領されたフランスから米国へ移住した人、作者マリイは施設でのケアワーカーという職歴のある人。そしてこれは、フランス新教育運動の中で作られたカストール文庫の1冊でもあるのです。

※『ミシュカ』マリイ・コルモン文／ジェラルール・フランカン絵／末松氷海子訳／セーラー出版  
(特別支援教育講座)

## ■ 一個のりんごから

藤田 博

「りんごに とって たいせつなのは たっぷり まるい と いうこと」(マーガレット・ワイズ・ブラウン『たいせつなこと』(フレーベル館))なのです。しかし、ただ丸いだけではりんごを特別な果物とするには不十分です。りんごの魅力は、左右に放物線を描きながら内へ内へと巻き込む、孔が二つあるその独特の形にあるのです。それがなければ、「鐘りんごん 林檎ぎんごん 霜の夜は 林檎のなかに 鐘が鳴るなり」(小島ゆかり)と詠われることもなかったはずです。りんごをバナナやブドウに置き換えることはできないということです。りんごが円環的時間の象徴となるのも、その形によるところが大きいと言えます。

ブルーノ・ヘヒラー文、アルブレヒト・リスラー絵『フーベルトとりんごの木』(講談社)には、りんごの木の大好きなフーベルトが、りんごの木とともに暮らした様子が描かれています。「フーベルトは いつしか、すっかり 腰の 曲がった おじいさんになって いました。でも、毎日、庭の りんごの木を ながめる たのしみは あいかわらずです。」「やがて 窓辺に 雪が 舞いはじめました。・・・フーベルトも 木も、春の 夢を見ながら、深い 深い 眠りに おちて いました。」りんごの赤と雪の白とが重なり合う、その中に長い時間が、再生へとつながる円環的時間が感じられるのです。



ライオンの王アスランから、「ナルニアのそと、西の荒野」の果樹園にあるりんごの木からりんごを一つもぎ取ってくるよう命令を受けたディゴリーは、取ってきたそのりんごを病気の母に食べさせます。母の病気は奇跡的に回復します。食べたその種を庭に植えると、りんごは芽を出し、大きくなります。C. S. ルイス『ナルニア国ものがたり』の第6巻『魔術師のおい』におけるりんごです。やがて倒れてしまったその木から作られたのが、長い物語の入り口、と同時に、ナルニア国への入り口となった衣装だんす、ルーシーが通り抜けた第1巻『ライオンと魔女』における衣装だんすなのです。時間が大きく前後する全7巻のこの物語にあって、時間を貫く役割をアスランとともにりんごが果たしているのです。

宮沢賢治にあって、りんごは時間を貫くものとしての役割を与えられています。汽車という時間を象徴するものとりんごの結びつきです。汽車の中で食べるりんごについて考えることは、『銀河鉄道の夜』での「苹果」(賢治による表記)を考えることと直結します。『「何だか苹果の匂いがする。僕いま苹果のこと考えたためだろうか。」カムパネルラが不思議そうにあたりを見まわしました。』その「カムパネルラの頬は、まるで熟した苹果のあかしのようにつくしくかがやいて見えました。」カムパネルラはこの時すでに死んでいます。水に溺れた友だちを助けようとして、自ら命を投げ出したのです。りんごのように頬が赤いカムパネルラは、りんごそのものなのではないでしょうか。

りんごが象徴するもう一つは罪の意識です。りんごと罪の結びつきは、アダムとイヴの楽園以来のもの。「罪」という抽象的意味であったラテン語 malum が、りんごの意味を持っていた偶然に由来します。光沢のある外側、それでいて中は虫が食っている虫食いりんごが、外観 (appearance) と内実 (reality) のテーマを表すものとなることについての確認も必要です。

ゴールズワージー『りんごの木』(岩波文庫)は、満開の白い花をつけるりんごの木から始まります。銀婚式を祝った旅の途中、車の窓からアシャーフトが目にした景色です。その下にあるのは、自ら命を断った、それ故墓地に埋葬することが許されない者の墓、アシャーフトが結婚を約束したメガンの墓なのです。そこから25年前へと話は戻ります。友人と旅に出たアシャーフトが足を捻挫して歩けなくなる、そのため一人残ることになったアシャーフトがメガンと出会ったのは5月1日、異教の月の第一日です。メガンを捨てたアシャーフトがステラ(「星」を意味する)と結婚し、「異教の地」を脱け出すのが4月30日。一めぐりする時がりんごによって象徴されているのです。同時に、満開の花をつける一本のりんごの木は、アシャーフトの罪の深さを象徴したものとなっているのです。

※『フーベルトとりんごの木』ブルーノ・ヘヒラー文/アルブレヒト・リスラー絵/木本栄訳/講談社

※『魔術師のおい』C. S. ルイス作/瀬田貞二訳/岩波書店

(英語教育講座)

## ■ 附属幼稚園の3歳児に人気のある絵本を紹介します

田淵 昇三

### 五味太郎作『かくしたの だあれ』（文化出版局）

「はぶらしかくしたのだあれ」とたずねますと、「あつワニさんの歯になっている。」  
「ぼうしかくしたのだあれ」って聞きましたら、「小鳥さんがぼうしをかぶっている。」  
と子どもたちは、かくしてあるところをさがして見つけて答えました。一緒に読んだ後も、また友達と、「かくしたのだあれ」と言いながら楽しんでます。



### エリック＝カール作・もりひさし訳『はらぺこ あおむし』（偕成社）

この絵本は、生まれたばかりのちっぽけなあおむしが、たべものさがしをはじめるお話です。月曜日にりんごを一つ。火曜日はなしを二つ。水曜日はすももを三つ…。でも、やっぱり、それでも、まだまだおなかにはぺっこぺこ。子どもたちは、



「よく食べるね。あむあむ…」

「くいしんぼうだよね。あおむしさん。」

と言い合っています。あおむしさんはむくむくとふとっちょになり、何日もねむりました。次に、そっとページをめくりますと、きれいなちょうがあらわれました。子どもたちは思わず、（うわあっ。）と口を開けました。寄せ合った頭と頭は、まるで絵本に吸い込まれていくかのようでした。

（附属幼稚園副園長）

## ■ 子どもたちに大人気、目でも耳でも楽しめる絵本です！

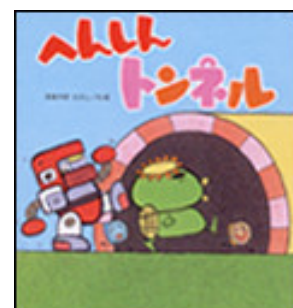
佐藤 実千代

### あきやまただし作『へんしんトンネル』（金の星社）

言葉に目覚めた5歳児にとって、ページをめくるたびに期待が高まる『へんしんトンネル』は、玉手箱のような絵本です。

「かっぱ かっぱ かっぱ」と、かっぱがつぶやきながらトンネルをくぐります。そして、トンネルから出てくると…どうでしょう。子どもたちは、「かっぱ かっぱ かっぱかっぱかっ ぱかっ ぱかっ」と口ずさみ、ページをめくる前に大騒ぎ。「ぱかっ ぱかっ、だから馬だ。ほら、馬になって出てきた。」そうです。「げんきな うまに なって」でてきちゃうのです。トンネルをくぐると、「とけい」は「けいと」に、「ぼたん」は「たんぼ」にへんしんしてしまう楽しさに、子どもたちだけで何度も読み返す姿が見られます。

他に、『へんしんトイレ』、『へんしんコンサート』、『へんしんおばけ』、『へんしんマラソン』という続編もあります。飾り文字が絵のようになって、視覚を楽しませてくれる絵本です。



（附属幼稚園5歳児担当）

## ■ 与えることの意味を考えさせてくれるこの一冊

シェル・シルヴァスタイン作・絵、ほんだきんいちろう訳『おおきな木』（篠崎書林）

田島 由佳



原題を *The Giving Tree* というこの本と出会ったのは、中学3年生の時でした。これは小さな男の子と一本のりんごの木のお話です。小さな男の子と木はとても仲良しでした。毎日一緒に過ごすことができ、木はとても幸せでした。しかし、男の子が年をとるにつれ、木のところへ遊びに来ることが少なくなっていきます。寂しい思いをしている木のもとへ、久しぶりに男の子がやって来るのですが、木と遊ぶことより、お金を欲しがったり、遠くへ行きがったりで、木の気持ちをまったく考えないようになっています。そんな男の子に木はりんごの実を与えてお金にさせ、幹を切らせて船を与えます。それでも木は幸せなのです。

自分のすべてを与え、切り株だけになってしまった木のもとへ、年老いた男の子がやって来ます。疲れ果てた男の子に、木は、「もうなにもあげられるものがなくなってしまったわ。でも、わたしの切り株に腰掛けて休んでちょうだい。」と言います。絵本は男の子が切り株に腰掛ける絵で終わっているのです。この終わりが意味するものは何なのでしょう。木は本当に幸せだったのでしょうか。

中学生の頃、「この木は誰を表していると思うか」と問いかけられたことがあります。この木は、何の見返りも求めず、無償の愛を与えつづける母の姿を表したものに思えます。今、教師を目指している自分は、どれだけこのおおきな木に近づけているのでしょうか。与える立場になろうとしている今、もう一度この本と向き合っ、与えることの意味について考えてみたいと思っています。（国際文化専攻3年）

## ■ 新刊紹介

バージニア・リー・パートン文・絵、石井桃子訳『ちいさいおうち』（岩波書店）

これは「むかしむかし、ずっと いなかの しずかなところ」にあった「ちいさいおうち」の物語です。ちいさいおうちは「おかのうえから まわりの けしきを ながめて しあわせにくらしてきました。」「まわりの けしき」の一つがりんごの木でした。「はるが くと、・・・りんごのはなが いっせいに さきだします。」「なつになると、・・・りんごのみは じゅくして、あかく なりはじめます。」「あきがくると、・・・りんごつみが はじまります。ちいさいおうちは、それを みな おかのうえから じっとみていました。」「ふゆがくると、・・・いえのあたりは ゆきで まっしろに なり、・・・やがて、りんごの木は としをとり、あたらしいのに うえかえられました。」

「ところが、ある日 いなかの まがりくねったみちを、うまの ひっぽっていない くるまが はしってくるのを みて、ちいさいおうちは おどろきました。」馬車に代わる車の登場です。まっすぐな道が次々につくられていきます。「ちいさいおうち」の前を電車が走り、「ちいさいおうち」の下を地下鉄が走り、暮らしのスピードが急速に増していきます。「もう いつ はるが きて、なつが きたのか、いつが あきで、いつが ふゆなのか、わかりません。いちねんじゅう いつも おなじようでした。」「ちいさいおうちは まちは いやだと おもいました。そして よるには、いなかの ことを ゆめにみました。」

やがて立ち並ぶビルの真っ只中に埋もれてしまったその家を「このいえを たてたひとの まごの まごの そのまた まごに あたるひと」が見つけます。「ちいさいおうち」は、りんごの木のある丘へ引越することになるのです。「ちいさいおうちは・・・また お日さまを みるこが でき、お月さまや ほしも みられます。そして また、はるや なつや あきや ふゆが、じゅんに めぐってくるのを、ながめるこも できるのです。」

これが出たのは昭和56年、「新刊」には程遠いものです。それでもここには「新しさ」があります。時代が進むなかでも変わらない、変えてはいけないものがあることの教えです。今年、101才で亡くなった、一めぐりする時間を生きた石井桃子の熱い思いが伝わってくるのです。

（藤田 博）

発行：宮城教育大学附属図書館

